道新でワークシート

年　組　名前

オホーツク沖合「地まき」稚貝大幅減

ホタテ養殖 温暖化の影

サロマ湖で1年かけて育てたホタテの稚貝をオホーツク海沖に放流する「地まき」で、地元漁協が稚貝の確保に苦心している。昨年、稚貝になる前の幼生が十分に育たず、採取数が減少、これに伴い、稚貝の数も減ったからだ。原因ははっきりしないが、地球温暖化で湖内の水温が上昇したことが影響しているとの見方もある。

15日午前6時ごろ。北見市常呂町の栄浦漁港では、漁船乗組員らが網に入った大量のホタテ稚貝を港に引き揚げ、放流船に積み替えた。例年は活気づく浜だが、今年はどこか控えめだった。

その理由は昨年、全道で幼生の採取数が大幅に減少したこと。全体の採取数は把握できていないが、北海道水産林務部は全道の漁協などに聞き取り調査を実施。オホーツク海沿岸の採取数は平年の1～4割にとどまっていた。

幼生の採取数が減ったことは、翌年の稚貝の数に直結する。常呂、湧別、佐呂間の3漁協のうち、常呂漁協は今季、例年通り約3億1850万粒を放流する見通しだが、紋別、猿払、枝幸の3漁協に販売する稚貝は例年の半分の2044万粒に減らさざるを得なかった。

一方、湧別漁協は例年の水準を保つのに「苦戦している」と明かす。

水産試験場などによると、幼生が採れなかった原因は特定されていないが、地元では「湖の水温が上昇していたのが原因では」との声がもれる。

ホタテは冷たい水で育ち、特に稚貝は海水温の上昇が成長の阻害要因となる。2023年に稚貝の大量死が確認された能取湖では、前年の12月に水温が4度になった。東京農業大学の千葉晋教授＝水産増殖学＝によると、「前例はなく、異常事態」という。

常呂漁協は「昨年はホタテの幼生が湖内で十分な大きさになるまで育たなかった」（中川修副組合長）と分析。今季は湖内に漂う幼生を付着させ、稚貝に育てる「採苗器」を入れる日をずらし、付着に適したタイミングを探ることにした。さらに採苗器の数も増やし、十分な量の幼生を採取する考えだ。

放流船に積み替えるため、かごに入れられるホタテ稚貝。今年は異例の少なさだった＝15日（星野雄飛撮影）

サロマ湖の幼生育たず 各漁協、確保に苦心

ただ、幼生を採取し、稚貝に育てるには人手がいる。採苗器に付着した幼生は成長するごとに、別のかごに入れ替えなければならない。地まきをせず、湖内で養殖する稚貝は一つ一つロープにつるす「耳づり」が欠かせない。ところが、高齢化が進む中、組合員数は減少の一途をたどる。常呂漁協では今年、組合員が124人と記録がある1973年以降で最少となった。

道によると、幼生の採取数減は「極めて異例」で、今後の見通しは不透明だが、中川副組合長は「生き物なので、湖内で何が起きているかは分からないが、試行錯誤を重ねながら育てたい」と話した。（佐藤菜々子）

オホーツクREPORT

年　　組　　名前

道新でワークシート

（1）湧別漁協が「地まき」用のホタテの稚貝確保に苦戦している理由を記事から二つ読み取りましょう。

（2）幼生が採れなかった原因は特定されていないとのことですが、地元の人や大学の研究者たちはどのように捉えているのか、記事から読み取りましょう。

（3）北海道の食材として全国に知られているホタテの生産を将来に渡って維持していくために、今、私たちにはどのようなことができるでしょうか。